

NTTグループの視点

迅速に対応できる体制と人材を強化して
オープンソースの普及を促進していく

NTT データ

技術開発から保守運用までの
ワンストップサービスを提供

2004年8月に設立されたオープンソース開発センタ（以下、OSDC）の経緯と狙いをお話してください。

牛田 業務システムへのオープンソースソフトウェア（以下、OSS）の利用が拡大していますが、多くのお客様は「運転管理に必要な機能が不足している」、「ミドルウェア相互の整合性に不安がある」、「保守サポートが弱い」といった不安を抱えています。このような課題の解決とOSSへの対応力を強化するために、2003年12月に「オープンソースソフトウェアセンタ（OSSC）」を設置しました。ここでは、活用にあたってのガイドライン作りや当事者能力の強化、フルオープンソースソリューション「Prossione（プロシオーネ）」の開発などを行いました。このOSSCがOSDCの母体になっています。

どのような組織で構成されていますか。

牛田 「OSSインテグレーションビジネスユニット」と「技術開発担当」で構成されています。OSSを利用したシステム開発を行いながら、それに必要なミドルウェアや開発支援ツールの開発、OSS製品の評価・検証と各ソフトウェアとの整合性評価に基づいた技術サポートなどを各事業本部に提供し、SI事業を支援しています。代表的な事例に、郵便貯金キャッシュカードの所持者に対する会員制サービス「ゆうちょくらぶ」の会員情報管理システムがあります。本システムでは、OSSを全面的に採用することでシステム全体の大幅なコスト削減を実現し、24時間365日利用可能な高い可用性と、1000万人規模のデータ件数に耐えられる高い処理能力を実現しました。そして、オープンソースのDBMS



(株)NTT データ
オープンソース開発センタ
企画担当 課長
牛田 修司氏

（データベース管理システム）であるPostgreSQLを使用しましたが、不足していた機能を独自に開発しました。ここでの取組みは、Linuxクラスタに最適なDBMSとして当社が開発し、OSSとして公開した「PostgresForest」に活かされています。また、故障解析ツール「Linaccident」をVA Linux Systems Japan(株)と共同で開発し、核となるカーネルダンプ部は同じくOSSとして公開しました。

先ほど開発中と言われていたProssioneとは、どのようなソリューションでしょうか。

牛田 OSSを利用したローエンドからミッドレンジ・クラスのシステムをワンストップの保守サポートを実施することで、不安や制限を払拭するフルオープンソースのソリューションです。脆弱な運転管理などの機能についても、当社が整備・開発することで補強しています。

OSSに関連したビジネスを進めて行く上で、どのようなことがポイントになるのでしょうか。

牛田 OSSは、ソースはオープンですが、構築されたシステムやソリューションは全て自己責任であるということです。つまり、お客さまに安心していただけるためには、トラブルが発生しても迅速に対応できるよう、当事者能力を強化しておくことが不可欠だということです。その一環として、OSSに関連したガイドラインの制定や独自の認定基準に基づいた審査制度を設けています。

NTT コムウェア

OSSのメリットを最大限に活かして 基幹システムへの適用を推進していく

オープンソースソフトウェア（以下、OSS）のメリットとは何でしょうか。

北井 まず「コスト削減」があげられます。このコスト削減とは、システム開発とその後の運用、保守を含めたTCOの削減のことです。当社は、OSSを使用した環境へのNTTの基幹系システムの移行業務を進めています。この場合のコストとして、ハードウェア、ミドルウェア、OSなどの導入コストや運用・保守コスト、アプリケーション移行のコストなどがあります。OSSは低価格なライセンス料もしくは無償で利用できるため、導入コストおよびアップグレード時のコストを削減できます。またOSに依らないIAマシンを使用することで、コストパフォーマンスの高いシステムを構築できます。但し、アプリケーションの移行など、多少コストがかかりますが、総合するとかなりのコスト削減が可能です。

よく「ベンダーロックインからの回避」と言われますが、これはどのようなことを指しているのでしょうか。

北井 システムやサービス品質の選択をユーザー主導で行えるということです。これは、システムを利用するお客様だけでなく、システムを構築する当社にも当てはまることです。当社はミドルウェアやOSの評価や開発を行っています。OSSについては、メインはユーザーの立場です。当社の役割は、最適なミドルウェアやOSを利用して、アプリケーションの生産性を向上させることです。そのためには、ミドルウェアやOSが統一されていることが望ましいです。その手段の1つがOSSの適用です。OSSを適用することで、統一された



NTTコムウェア㈱
オープンソースソフトウェア
推進部
OSS基盤部門長
北井 敦氏

基盤上でのアプリケーション開発に専念することができます。

NTTコムウェアによる、代表的な事例をご紹介しますか。

北井 2004年10月からサービスを開始した、国内通信事業者の「明細系システム」があります。これは、通信事業者の顧客が他通信事業者の顧客に電話をかけた際に発生する各社間の精算額を算定するシステムです。全国に設置してある交換機から1日最大1億コールにもものぼる情報を処理しています。これまではメインフレーム上で稼働していましたが、保守や運用に関わるランニングコストの負担が大きな課題になっていました。OSSを適用した新システムでは、サーバの保守費を大幅に削減するなど、大きな成果をあげています。

OSSを適用したシステムを構築していく上で、どのようなことがポイントになるのでしょうか。

北井 今後は、OSSのメンテナンスを行える技術者が必要になるでしょう。当社では、OSSを適用したシステムの保守・運用などを通じて、技術者の育成に注力しています。また、OSSの開発とビジネス開発を両立させているVA Linux System Japan(株)との協業により、多くのカーネル技術者を養成してきました。このような技術力をベースに、OSSをお客様のビジネスに活かしていきます。